

1 学校教育目標

学校教育目標 生徒の個性を尊重し、伸ばし、一人一人の夢の実現を図る。

- 綱領
- 自主積極研学の道に邁進しよう
 - 気節を尚び、礼儀を重んじよう
 - 質実剛健を旨とし、勤労を愛しよう

校訓

「自主」「礼節」「勤労」

県教育委員会各課の本年度の教育指導の重点及び取組の方向を踏まえ、本校の「綱領」並びに「校訓」の精神を柱とし、松高スピリッツ（品性を磨き、感性を高め、徳性を養うことで、明るく生き生きとした活力あふれる生徒を育成する。）の具現化に向けた教育を実践する。

2 本年度の重点目標

1 生徒の健全育成

- (1) 生徒指導方針の共通理解及び全職員協力体制による生徒の基本的な生活習慣の確立と規律ある生活態度の育成
- (2) 挨拶の励行・整った身なりを徹底し、地域から信頼される学校に
- (3) 家族を大切にする、友達に優しくするなど他人の気持ちを理解できる生徒の育成（人権意識の高揚）

2 基礎学力向上の推進

- (1) 基礎学力向上対策委員会の設置と具体的方策の提示
- (2) 興味関心の湧く授業の創造
- (3) ICTの活用を含め、主体的・対話的で深い学びとなる授業内容の工夫

3 進路指導の充実

- (1) 生徒一人一人の能力・適性等に応じた指導の徹底
- (2) 大学入試・就職試験などに対応できる基礎学力の充実
- (3) 将来の自分の生活設計が見通せるような資料の提供や、先生方自らの体験談を日常的に語れるHR活動

4 本校への入学者を増やす取組

- (1) 他の中学校との交流及び学校説明会等の強化促進
- (2) ボランティア等地域活性化の役割を担い、地元の子供は地元で育てることを強くアピールする
- (3) 生徒・職員が地域の行事等へ積極的に参加する
- (4) HPやマスコミを通じての情報発信

5 組織的に動く指導体制

- (1) 学科間の連携強化（松橋高校のためにどうすべきかを考える）
- (2) 危機管理の徹底（起こさない取組・起こった後の対応）特に重視すべきは初動に有り。この初動を単独でなく組織で意識統一して動く。チーム松高で難題に取り組んでいく。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	教育方針に基づいた、学校教育目標の達成	学校活性化のための特色ある教育活動の展開	○次期学校改革を見据え、教育活動の特色化およびその魅力発信が十分なされ、「変化」と「期待」が学校内外で感じられ、最終的には志願者が増加する状態	①プロジェクト会議・チームをうまく機能させ、学校改革が進展し、学校活性化に繋げる。 ②教育活動公開の機会を増やし、広報の充実を図って、積極的に情報を発信する。 ③学校HPや安心メール、学校パンフを活用して各種教育活動の魅力を発信して、変化する本校を積極的に紹介する。	B	○プロジェクト会議や若手職員チームを組織して学校改革の素案作りや探究学習の開発を進めることができた。昨年度発行できていなかった広報紙を新たに「松高の力」として13回発行した。また学校パンフも大幅に刷新できた。

					<p>●生徒・保護者において本校の変化・魅力が伝わっていない点の一部見受けられる。校内外を問わず、HP、広報紙、学校パンフをさらに深化・発展させて、発信する必要がある。また広報紙は、管内だけでなく、管外中学校、そして地元事業所等にも配付して、広報をお願いしたい。</p>
	目指す生徒像、学校像の実現	○全職員が連携して学校教育目標の具現化を目指し、地域からは学校に対する高い信頼が寄せられている状態	<p>①在籍する生徒が誇りを抱くような教育活動を全教科において展開する。</p> <p>②学校行事の際などに、活躍する生徒の姿を見てもらう機会を数多く設ける。</p>	B	<p>○今年度もコロナ禍のため校内に外部を招いての教育活動を紹介する場が作れなかったが、7月の体験入学だけは全職員・全生徒で協力して実施できた。</p> <p>●昨年度実施できなかった体育祭、文化祭は、一時的に感染症が収まっていた11月に規模縮小、無観客で実施したが、その際に他校が積極的に行っているオンライン配信はしていない。次年度はICT活用教育のさらなる充実を図り、保護者・地域に生徒の活躍の場を見せられるよう工夫したい。</p>
学び合い高め合い支え合う職員集団及び働き方改革	持続可能な教育活動を目指すため業務改善意識の向上および時間外勤務の削減	<p>○スクラップ & ビルド^o および ICT 活用で仕事効率がこれまでより上がった状態</p> <p>○職員がストレスを軽減し、心身ともに健康な状態で教育活動に当たっている状態</p>	<p>①ICT を積極的に活用したり、データを共有化したりして業務効率を高める。</p> <p>②スクラップ&ビルド(会議や打合せの整理・削減を含む)や次年度引き継ぎを意識した取組で、業務のスリム化を進める。</p> <p>③年休などが取得しやすい雰囲気作りや行事予定策定を行う。</p>	B	<p>○職員のアンケート結果では3.2ポイントで比較的高く評価している。また勤務時間外の従事状況も昨年度比で改善している。また生徒からも先生方の向き合い方を3.3ポイントと高く評価している。</p> <p>●今年度は業務改善元年として取り組んできたが、次年度は更なる改善を図り、一部の職員の加重負担とならないようにし、持続可能な教育活動に取り組んでいきたい。</p>
	教師としての使命感や危機管理意	○職員が指導力向上のために自己研鑽に努めて	①負担感が少なく、有用感が大きい形式の職員研修を計画的に実施する。	B	○年度当初から動画研修を導入したり、教育漫画を導

		識の向上および資質・能力の向上	いる状態（不祥事ゼロの状態）	②観点別評価や探究活動において特に担当する職員には、視察研修やOJTを実施する。		入したりして、負担感を軽減した職員研修が実施できた。またNITS研修に計5名が参加したり、先進校視察にも10名が行ったりして、研鑽に努めてもらった。よって職員アンケートの結果は3.4ポイントと高評価だった。 ●上記の成果の反面、交通事故等も複数発生し、不祥事ゼロとは言い難く、年間を通して気を引き締めて公務に取り組まなければならない。
学力向上	教師の指導力向上	「分かる」授業の工夫と確立	○主体的・対話的な授業を展開し、生徒の深い学びにつなげることができるような授業を目指す。	○GIGAスクール構想による一人一台端末の活用を行う。	B	○ICT支援委員による研修や先生方の活用事例により、多くの先生が活用し、深い学びに向かっている。
	基礎学力の定着と学習習慣の確立	自宅学習の確立と定着	○通常1時間以上、考査前2時間以上の自宅学習を定着させる。	①考査前に限らず、毎日の授業で課題を提示する。 ②考査前に黙学を行い、学校での学習時間の確保を行う。	C	●考査前の黙学にはしっかり取り組むが、自宅学習の定着には至っていない。
		観点別評価の推進	○定期考査だけでなく、日頃の授業の取組の評価など、多面的評価を行う。	①定期考査の問題を改善し、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすように教科会等で検討を行う。 ②授業の振り返りシートを活用し、生徒自身の振り返りの機会を設け、次の学びに繋がるようにする。	A	○観点別評価についての職員研修を行い、意識を高めて、定期考査への反映につなげた。
キャリア教育（進路指導）	進路意識の高揚	3年間を見通したキャリア教育の推進	○卒業後の進路選択によって自分がどう生きていくかを考えさせる。 ○社会で生きていくために必要なマナーや自分の考えを伝える力、話を聞き理解する力を習得させる。	定期的に進路だより【羅針盤】を発行しタイムリーな情報を提供して意識啓発に努める。 1年生：進路講演会やガイダンスを通じて『仕事や学問』について学習する。また適性検査などを活用し自己を知る。 2年生：インターンシップにおいて仕事体験や上級学校体験を行い、進路目標についての手がかりを探し、具体的な進路目標を確立する。 3年生：「卒業生講話」「企業懇談会」「出前授業」等により詳細な将来の生き方を選択できるように促し、進路実現を目指す。	B	○進路だよりを月に1号の割合で、生徒の進路活動の様子や進路に関する情報提供を定期的に発行し、意識の啓発に努めることができた。 ●新型コロナウイルス感染症の影響で、インターンシップを始めいくつかの進路行事を実施することができなかったが、できる範囲であるいはこれまでと違った方法を取り入れながら実施し進路意識の高揚に努めることができた。
	進路目標	進学や就職	○2年生の3学	①2年2学期までの様々進路の取組みで進路目標を確立	B	○3年生は、ほと

	の達成	に向けての早い段階からの取組	期までには、進学か就職かを概ね決定させる。 ○3年生の進路実現	させ、2年3学期に就職希望者(就職がイッス)、進学希望者(小論文がイッス)に目的を持って参加させる。 ②3年では、それぞれの試験に向けて具体的な取組を実践し進路実現へとつなげる。		んの生徒が年内に進路を決めることができた。未定者が2名いるので決定するまで支援を続けていく。2年生は、保護者会時に行った進路別説明会などの進路行事を経て12月の進路志望調査で進路志望未定者数が減り、進路決定に向けて意識の変容が見られた。
生徒指導	「松高マナー」の涵養	正しい制服着用、元気な明るいあいさつ、正しい言葉遣いができる	○校内外を問わず、正しい制服の着用をする。 ○校外でのマナーの遵守。(松高マナー・交通マナー等)	①授業始業の際に、服装を正させる。また、元気な明るい挨拶を促す。 ②授業時の発問に対して、正しい言葉遣いで回答させる。 ③学校生活全般において、タイムリーに指導する。	B	○登校指導の際に制服の着こなし、大きな声での挨拶等を指導することで授業始業時の挨拶や返事等にも良い影響を与えた。
	交通指導の充実	毎月の交通安全呼びかけの運動	○交通委員に自覚を持たせ、交通安全の日を活かしながら全校生徒に対して交通安全の呼びかけを行う。	①交通安全の日(毎月10日)に学年当番で、教師と交通委員で啓発活動を行う。 ②特に自転車・原付バイク通学生は交通ルール、天候や道路状況、車両の特性を理解して運転するように、定期的に指導する。	B	○毎月、交通委員を中心に交通安全の啓発活動ができた。 ●新型コロナウイルス感染症の影響で、現時点では予定していた交通講話ができていない。
		二重ロックの徹底	○全校生徒への呼びかけ運動を継続して行い、二重ロックの施錠率を毎月95%以上にする。	○毎月の交通安全の日にチェックをし、啓発活動に努める。	C	●毎月のチェックは出来たのだが、施錠率が約82%と目標値に届かなかった。
	生徒会活動と部活動の活性化	部活動加入の奨励と各種大会やコンクール等への積極的な出場	○学校行事に対する全校生徒の意欲を向上させる。 ○部活動加入率を高める。	○部活動紹介や体育大会・文化祭などの学校行事を通して、勧誘を呼び掛けながら関心や興味を引く。	C	○感染症予防を行い、制約の中で可能な体育的・文化的行事を行うことができた。生徒達の、とても生き生きとした姿を見ることができた。 ●部員や顧問が、呼び掛けを行ったが、部活動加入率を高めることはできなかった。
人権教育の推進	人権意識の涵養と差別意識の解消	教職員の研修の充実と推進体制の機能強化	○管理職の指導により、人権教育主任が役割を自覚し、各部・学年と連携を図り取り組む。 ○校内外研修の充実を図る。	①人権教育推進委員会を中心に、人権学習LHRなど様々な取り組みを発信する。 ②同和問題の解決を中心に据えた校内研修を実施し、職員の人権意識を高める。 ③校外研修に積極的に参加し、その成果を復講することにより、全職員に周知する。	B	①ほぼ毎週実施することができ、組織的な取組ができた。 ②6回ほど校内研修を実施し、職員の人権意識向上を図った。 ③コロナ禍で、校外研修が少なかった。
		生徒の人権学習推進	○全教育活動に於いて、人権教	①主に人権学習LHRを通して、身近な人権問題や同和問		①人権学習LHRの内容を再検討した上

			育の視点を持ち取り組む。 ○人権教育LHR、人権週間における取組を計画的に行う。	題などの社会的課題に至るまで学習し、反差別の実践的な態度を養う。 ②自分とは違った考え方を尊重して相手を大切にしたいやりを持つ。	B	で実施できた。 ②様々な機会に働きかけを行ない、相手を思いやる心を育んだ。
特別な支援を要する生徒への個に応じた支援	職員の理解と意識の向上	○特別支援教育・高校通級(LST)・インクルーシブ教育システムについての理解を深め、スキルの向上を目指す。		①「生徒理解研修」時に、LSTの説明や授業の様子等を説明する。 ②LSTをゲストティーチャーにより実施する場合には、見学ができるように職員へ周知する。	B	○LSTの様子については「生徒理解研修」「生徒支援推進委員会」において、授業及び生徒の様子を伝えることができた。また、特別支援教育課・高校教育課のLST視察の際やラポール宇城からの出前授業の際には職員へ周知し、見学していただくことができた。
	支援を要する生徒への個に応じた適切な指導の充実	○支援を要する生徒の理解を深め、個に応じた支援を推進する。 ○生徒、保護者の教育的ニーズを理解し、合理的な配慮を行う。 ○インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組を行う。		①新生生についての「第1回生徒理解研修」熊本県が定めるガイドラインに沿って、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し「第2回生徒理解研修」を行う。また、「第3回生徒理解研修」において支援の評価を行う。 ②週1回「生徒支援推進委員会・特別支援推進委員会」「総合支援推進室」を開催し、生徒の情報共有・支援策の検討を行い、必要に応じて生徒や保護者がスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの支援を受けることができるようにする。 ③生徒本人や保護者より合理的な配慮についての申し出があった際には、校内で検討し特別支援教育支援員が学習支援や健康・安全確保等を行う。	B	○個別の教育支援計画・個別の指導計画については、熊本県が定めるガイドラインに沿ったかたちで作成し、研修を行うことができた。また、「生徒支援推進委員会・特別支援教育推進委員会」を週1回開催し、生徒の支援策検討や専門家へ繋ぐことができた。特別支援教育コーディネーターが三者面談等に同席し、合理的な配慮についての説明や支援策の提案等ができた。
命を大切にすることを育む指導	自他の生命を尊重する心の育成	○「心のきずなを深める月間」の取組を行う。 ○「ストレス対処教育」を全学年で行う。		①月間の周知と涵養 ②心のきずなを深めるための標語づくり ③心のきずなを深める詩の紹介 ④1年「私の四面鏡」「二者択一」2年「さわやかな自己主張」「月からの脱出」3年「アンガーマネジメント」の実施	B	○「心のきずなを深める月間」では、全校生徒による標語の作成や自分や他者の命を大切にすることについて考える詩の紹介などを生徒会と連携して行うことができた。「ストレス対処教育」については、教材をより本校生に合ったかたちで改良したが、グループワークの制限があり実施できないプログラムがあった。
いじめ	いじめの未然防止	生徒・職員・保護者の	○集会や講演会、研修会を積	①集会や講演会、研修会を行うことで自己肯定感・自己有用		●入学して学校に慣れ始めた時期や長期休業中に、SNS

の防止等		いじめ防止に対する意識の向上	極的に行い、いじめ「ゼロ」を目指す。 ○校内のいじめ根絶に向けた体制の充実を図り、学校内の言語環境を整える。	感を高め、いじめに負けない集団を作る。 ②各教科やホームルーム活動において、現代社会において起った事件等について考える時間を作り、生徒達と向き合う時間を確保する。	B	によるやりとりの中での言葉の行き違い等が見られ、言語環境に課題があると感じた。
	いじめの早期発見	いじめ早期発見に向けた取組の充実	○心のアンケートなどを活用し、いじめの早期発見に努める。 ○いじめに関する通報（スクールサイン）及び相談機関を生徒、保護者に周知徹底する。	①定期的なアンケートの実施と情報分析をし、職員間での共有を図り、早期発見・早期解決に努める。 ②日頃からスクールカウンセラー等の外部機関とも連携をとり、初動対応を迅速に行う。	B	○アンケートの結果をもとに会議を開き、状況の把握と対応策の検討を行い早期解決に努めた。 ○SCやSSW等の外部機関と連携がとれており、医療機関にも迅速に繋ぐことができた。
地域連携（コミュニティスクールなど）	地域活動への参加	地域ボランティア活動への参加	○宇城市や各地区の実行委員会との連携を図り、生徒へ情報を発信する。	○各実行委員会等との連携を図り、企画やボランティア活動へ積極的に参加する。	C	●新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒が参加する機会が少なかった。
		地域貢献活動への参加	○各市町村や地域の方々との連携を図り、生徒へ情報を発信する。	○宇城市役所、宇城商工会等との連携、街なか図書館との交流を図る。	C	●新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒が参加する機会が少なかった。
	保護者・同窓会との連携	PTA・同窓会行事への参加・協力	○喫緊の課題である定員割れの解消に向け、PTA・同窓会と協力して広報活動や中学校訪問を行い、入学者増を目指す。	○学校案内パンフレットを中学生にとって魅力的な形に全面的に改定したり、各学科の紹介チラシを定期的に作成したりして、各中学校等に配付し学校の取組を周知する。	B	○学校案内パンフレットの内容を検討し、魅力的な内容とした。生徒の活躍を紹介する広報誌を発行し、様々な活動を紹介した。
	学校運営協議会の推進	学校運営協議会の開催	○学校運営協議会を開催し、学校とメンバーが力を合わせて学校の運営に取り組むことにより、地域と一体となった特色ある学校を目指す。	○学校運営協議会を定期的に行い、メンバーからの意見を聞き、特色ある学校づくりにつなげる。	B	○2回の学校運営協議会を開催し、（2回目は3月に開催予定）メンバーから様々な意見を聞いて、より良い学校づくりに繋げることができた。

<p>4 学校関係者評価</p> <p>○先生方の日常、学級、学年、進路指導、生徒指導におけるきめ細かな対応がなされていることが理解できた。学力差が大きい中、個々の特性、学力に応じて進路指導がなされていることも理解できた。</p> <p>○学校の教育活動の取組は、すばらしいものがあり、地域との連携、情報の発信、生徒個々の頑張り、進路状況等、学校の取組としてやれるだけのことはなされている。</p> <p>○中学校時代に不登校傾向だった生徒が、松高入学後に意欲的に頑張っていること等は、非常に価値ある成果ではないか。</p> <p>○自分を大切に、相手を思いやることができる人として成長してほしい。そのことが多様性を認めることに繋がる。松橋西支援学校との交流が深まっていくためには、まずはお互いを知ることなので、オンラインでの交流の取組など、大変良い試みであった。</p>

- 何事も「自分事」として感じる人に成長してほしいので、命を大切にすることを育む教育にさらに取り組んでほしい。よって、『心の絆を深める月間』はよい取組なので継続してほしい。
- 基礎学力が不足している生徒に対し、社会に通用する最低限の「読み、書き、そろばん」を身につけさせ、「あ・た・り・ま・え」「スナドジョウ精神」を浸透させることは良い。
- 地域連携推進委員会がとても大きな役割を果たしていた。行政や地域と連携を取り、広報を利用して生徒の意識が変化したのではないかと。机上の学びだけではなく、人や社会との関わりの中で学ぶことが本校の強みとなると感じる。
- 総務部におけるPTAの豚汁作りは、次年度は実施したいと考えており、PTA役員内でもその意識作りをしていきたい。
- 次年度は高P蓮中央地区の幹事校としての役目があるため、今後も学校と連携を密にして取り組んでいきたい。
- △今は、大きく変化していく時代。自然環境問題が引き起こす様々な災害、感染症問題、また国家間の侵略など何が発生するか不透明な時代。討論できなくとも新聞や報道から感じたことなどタイムリーに話す習慣を付けて自分の意見がはっきり言える人に育ててほしい。またこれからの時代、男だから女だからではなく、一日の人間として社会で交流しながら360度から物事を捉え考えることができる人として成長することを期待するし、そのような教育に取り組んでほしい。若い感覚で世の中を変えていくような松高生であってほしい。松高生は地域貢献できるような生徒を育てていくことを目標としては如何。市議会議員に挑戦するような生徒を育ててほしい。
- △個人差が大きい学校だと理解している。義務教育課程の学び直しが必要な生徒がいる中、個別対応が求められている。焦点をどこに置くか、誰1人取り取り残さないことが公立学校の使命であり、困難さを伴うものだと考える。
- △元気な声で明るい、笑顔の挨拶を徹底することで多くのことが変化していく。人としてのマナーなので習慣化していくことが大事である。
- △コロナ禍で感染対策、授業時間確保、日常業務等、先生方の負担増が気になった。
- △4月から成人年齢が18歳に引き下げられ、高校での成人教育が必要となり、先生方の負担が増すことになると思うが、現実の大人の社会に踏み出す卒業生には社会の現実、法律、契約、金銭問題等、様々なことについて一応の教育が必要となってくるがどうするか。
- △特別支援教育が必要な生徒が増加傾向にあるが、松橋西支援学校高等部との連携、教員の研修等に取り組んでみては如何。
- △志願者の激減で学校の対応も大変だと思うが、中学校の進路指導とも連携し、課題やその対策について本運営協議会でも議論して見ては如何。
- △重点目標が15項目あるが、数項目に絞り込んだ方が良い。その数項目についてこの1年「何をしたか」「結果はどうであったか」を端的に整理し、生徒や保護者にアピールした方がわかりやすい。
- △生徒募集について、定員割れは仕方ないとしても、更に進む現状を阻止する具体的な方策を考えてほしい。
- △入学者減は、少子化社会における難題であり、学校だけの問題ではなく、社会の問題である。学校は生徒が少なくなり、企業にとっては働き手がなくなる。効率化、IT化で解決する問題でもない。進学を希望する生徒は熊本市内へJR通学するし、私立高校へ進む傾向は大きくなるだろう。その中で松橋高校の役割を考えていく必要がある。
- △地域連携がC評価となっていた。部活動の活性化も気になるのだが、なかなか活路を見いだすことは厳しい状況だ。それよりも中学校と高校が連携しながら地域貢献をすることには夢があり、中学校としても本気で取り組みたいところ。感染状況次第ではあるが、職場体験を合同で行ったり、部活動も連携して指導したりすることもよい取組ではないか。
- △宇城圏域の出生数が減る中で、生徒数を確保するのは至難のことだが、それでも宇城市役所松橋本所を中心とする半径20kmの生活圏の人口は県の総人口の1/4、40万人を超えており、潜在的な高校受検者数は決して少なくない。今いる生徒、保護者のニーズあるいは来年度以降の受検者となる近隣中学生とその保護者のニーズを整理し、優先順位を付けて取り組んでいただきたい。

5 総合評価

今年度は、昨年度までの評価項目を各部署で総点検し、本校の現状、時代や地域のニーズに合わせるため、目標、方策、そしてアンケート項目も大幅に改編して取り組んできた。アンケート自体も昨年度までのマークシート回答からICTを活用した回答方式に変え、回答だけでなく集計も大幅な時短、負担減を実現させた。同時に回答率も上がった。集計結果も全て数値化して、比較分析がしやすいように改善した。次年度以降もこの方式を継続したい。

評価結果については、概ね好意的な評価であったが、「自宅学習の確立と定着」、「部活動加入率の向上」「地域貢献活動への参加」等に関して、評価が低かった。今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受け、計画していた活動を中止、縮小せざるを得なかったことも要因としてあげられる。一方、1人1台端末導入を契機に本校のICT教育が劇的に進んだのも今年度の大きな成果である。ICTを活用した学習だけでなく、教職員の業務効率化にも一役買った。それが生徒・保護者、そして職員アンケート結果にも如実に表れていた。

6 次年度への課題・改善方策

【課題】

- ①本校の魅力創造および魅力発信
- ②基礎学力の定着と学習習慣の確立
- ③部活動加入率向上と部活動の活性化
- ④地域ボランティアや貢献活動への参加

【改善方策】

上記①～④は、新型コロナウイルス感染状況に左右される部分も大きいですが、コロナ禍であっても松高の生徒・職員が「今できる精一杯のこと」を一つ一つ丁寧に取り組むことで、課題を解決していきたい。

- ①については、今年度模索しながらも取り組んできた魅力創造（学校改革、探究学習、one team事業など）を継続し、『松高の力』を中心とする魅力発信も管内中学校に留まらず、管内事業所や管外中学校にも発信していきたい。
- ②については、今年度から取り組み始めた1人1台端末を活用した授業改善や観点別評価を意識した授業改善をさらに進めるとともに、生徒には学ぶことのおもしろさ、学ぶことの意義、そして主体的に学び続ける大切さを教務部、進路部を中心としながらも各学年部で教授していきたい。
- ③魅力化プロジェクト外会議や生徒部を中心に部活動の整理・活性化を模索してきたが、その一つとして次年度に『松高DX部』創部することで進めてきた。eスポーツ、デジタルボランティア、健全なスマホの使い方研究等、生徒のICT技術向上のみならず地域貢献にも携われる機会を提供する部活動である。地元宇城市と連携して部の発展に取り組んでいきたい。
- ④今年度も、様々な制限がありながらも通称『宇城プロ』の生徒・職員が可能な範囲で地域貢献活動に取り組んできた。その挑戦的な活動の成果は、『松高の力』でも発信してきた。次年度も感染状況を考慮しながら、精一杯取り組んで、『宇城地域になくてもならない松橋高校』をPRしながら、生徒自身の自己肯定感、達成感を高めていきたい。